
ふくいミュージアム

1989.9.30

No.16

福井県立博物館



石造 多宝塔 (朝日町 仏性寺)

第11回

特別展

石をめぐる歴史と文化

10月20日(金)→11月26日(日)

壮麗な石の神殿や豪壮な石のモニュメントなど、人類は古くから多くの石の文化を築きあげ、地球上に驚くべき遺物や遺跡を残してきました。これに対し、西洋人が「日本の文化は紙と竹と木の上に築かれている」と評するように、日本における石の利用はめだちません。しかし注意してみれば、さまざまな用途に、石の特性が生かされ利用されていることがわかります。

ところで、福井は笏谷石という良質の石材を豊富に産出し、古墳時代の石棺から現代の建築用材にいたるまで、長い歴史の中で広い用途に使用されてきました。また、日本海海運を利用して沿岸各地へも移出されてきました。

今回の特別展では、笏谷石の利用の歴史や技術をさぐるとともに、生活の中の石の利用の再発見を試みたいと思います。さらに、信仰にかかわる石や石造物をとおして、日本人の石に対する想いを考えようとするものです。

展示は次のように構成される予定です。

I、くらしの中の石

石は重い、固い、燃えない、腐らないなど、石のもつ性質を利用した、さまざまな民具を中心に展示し、石と生活とのかかわりを示します。石が意外なほど身近で使われてきたことを理解していただける



ヒデタキ (石川県金沢市)

はずです。

II、笏谷石の利用の歴史

福井を代表する石材である笏谷石について、古墳時代から朝倉時代、江戸時代と、その利用の歴史を示す代表的な石造遺物を中心に展示します。各時代の笏谷石の利用度が段階を追って広がっていき、しかも遠隔地まで運ばれていったことがわかります。



石造 千手観音菩薩立像 (敦賀市 定光院)

III、石に生きる

石を採掘し加工して生きてきた職人である石工の道具などを展示し、その技術をみます。また、県内には浄教寺砥石、宮川石硯、若狭めのうなど、特殊

な用途に使用され、貴重な産物となった石があります。これらについても、代表的な製品や、製作工程を示す道具や遺物などを展示します。



石工 (美山町小和清水)

IV、石への想い

日本人は古くから、石や岩には神霊が宿るといふ信仰をもってきました。石造物の多くも信仰に関わ

るものです。ここでは民間信仰の観点から展示を構成します。小石ひとつだけのものから、奇妙な形をした自然石、おだやかな顔立ちの道祖神や石の地藏などを展示します。ここに展示されるものは、どんな簡単なものも、日本人が神に捧げたり、神として拝んできたものばかりです。



道祖神 (長野県東筑摩郡朝日村)

冬の企画

2月7(水)→3月18日(日)

館蔵品展



伝旧本多邸鬼瓦

博物館では開館以来、寄贈・寄託・購入・採集などの方法によって、本県の自然や歴史に関する資料を収集してきましたが、その数は現在、約7万点あまりになります。これらは常設展や特別展によって公開してきましたが、ほとんどの資料は公開されていません。そこで、今回の館蔵品展では、昭和62年以降に収集した資料のうちとくに資料的価値の高いもの約200点を、考古・歴史・民俗・美術工芸の各分野にわたって展示し、資料の収集にご協力くださいました方々に感謝の意を表するとともに、今後の博物館の資料収集活動に対する県民のみなさまのご理解とご協力を得ようとするものです。

研究ノート

手取層群の恐竜化石

ここ4年ほど北陸一帯に分布する手取層群の調査を行い、恐竜化石をはじめとした古脊椎動物化石の研究にとりくんでいる。ここでは、今日想像できる手取湖周辺の復元を試みてみたい。

手取湖の周辺に恐竜が生息していた時代は、白亜紀前期で約1億4000万年から1億2000万年前頃と考えられる。当時、現在の北陸一帯はアジア大陸東縁の大陸の一部であり、手取湖はそこに形成されていた。湖といっても一つの大きな湖ではなく、比較的小さな帯水域が散在し、それらが大きな河川でつながっており、増水時期には帯水域が広域にひろがっていたと思われる。このような所に森林が形成していた。森林のようすは白峰村桑島化石壁からの植物化石の研究でかなり詳しくわかっている。イチヨウやマキの仲間が高くそびえ、それらの間にソテツの仲間が繁茂し、カセキトーデシダやクサビシダ、エダワカレシダなどのシダ類が下草を形成し、カセキゼニゴケが湿気の多いところに着生していたと考えられる。これらの化石林は暖温帯の落葉樹林とされ、日差しが地面に届く程度の疎林であったことが言われている。また、白峰村桑島化石壁などで見られる直立樹幹(珪化木)の産出状況からみて、河川の氾濫原のような所にも森林が形成していたとも考えられる。森林の中にはアスワテドリリュウ(トカゲの仲間)や昆虫がいたことも化石の証拠からはっきりしている。このような環境を舞台に”手取の恐竜群”は活動していたのである。

湖の岸辺近くのぬかみみをシラミネリュウ(足跡)やクワジマリユウ(足跡)たちが歩いて行った。シラミネリュウは大小2個の足跡化石(連続歩行ではない)で、イグアノドンの足跡に似ており、クワジマリユウは獣脚類を思わせる足跡と想像している。食肉竜のカガリュウ(歯:メガロサウルス科)は、植物食恐竜を求めて森や岸辺をさまよっていただろう。植物食恐竜と思われるシマリユウ(歯:鳥盤目のどれかと考えられる)もいた。この夏の調査で植物食のディプロドクス科

(竜脚類)と考えられる歯も発見された。これらが今のところ白峰村から発見されている恐竜たちである。

勝山市から発見されている恐竜群はさらに豊かな群れである。また、ここから発見される恐竜はそのほとんどが、これまで日本から発見されていない種類のものとして注目をあびている。食肉竜の恐竜としてカツヤマリュウ(尺骨、尾椎骨:アロサウルス科と考えられるもの)、キタダニリュウ(歯:コエルロサウルス下目と考えられるもの)、キタダニリュウとは別の種類のコエルロサウルス下目と思われる歯、種類未定の食肉竜の歯などが採集されている。植物食の恐竜では、スギヤマリュウ(歯:カマラサウルス科と考えられるもの)、スギヤマリュウとは別種類の竜脚類の歯2種類、鳥脚類と思われる骨(大腿骨)などが明らかになっている。さらに、この夏の調査で秘かに期待はしていたものの、まさかと思っていたフクイリュウ(歯:イグアノドン科)も発見できた。このイグアノドン科の発見の意味は大きい。イグアノドン科の代表格のイグアノドンは、1822年にイギリスのマンテル夫妻によって発見され、最初に恐竜として認められたものである。そして、イグアナに似た歯と言う意味でイグアノドンと名づけられた。現在では、イグアノドン科の恐竜は世界各地で発見されているが、この種類が日本にも存在していたという新しい事実は、日本にも外国の恐竜産地にひけをとらないほど恐竜が生息していたことを物語っていると思われる。この他に、種類は特定できていな



ヒサ クニヒコ原画

いが、肋骨、肩こう骨、趾骨、爪など異なる部位の骨格が明らかになってきている。目下、発掘後博物館に持ち帰った大量の岩石のクリーニング作業を行っているので、さらに新たな歯や骨格が明らかになって行くものと思われる。ともあれ、これまで手取層群から明らかになった恐竜は、勝山市から肉食4種類、植物食5種類で、白峰村から肉食1種類、植物食2種類の計12種類は明かであろうと考えている。

豊かな植物に恵まれた手取の森林を背景に、植物食の恐竜の群れが生息できる環境が

手取湖の周辺にあったに違いない。この夏の調査で、日本ではじめてのイグアノドン科の存在が明らかになったことは古環境を考えるために大きく貢献する。イグアノドン科の代表格のイグアノドンは(イグアナの歯)という意味)、二足歩行ができる植物食恐竜の代表的な種類で、歯や頭の骨の特徴からトクサや硬い植物を食べるのに適していたと考えられている。また、彼らの生活の場は亜熱帯的環境下のデルタを流れる河の周辺で生活していたとも言われている。



尺骨 (アロサウルス科)



勝山市北谷町から産出した恐竜化石

彼らが好む生活環境は、推定される手取湖周辺の古環境と極めて類似しているのではないだろうか。

トクサの密生する沼の岸でイグアノドンがメガロサウルスに追われ、アロサウルスが竜脚類を倒し肉を引き裂き、そばでコエルロサウルスの仲間が待機している。このように外

国の復元画にみられるような光景が、手取湖の周辺で展開していたのではないだろうか。事実、骨の表面に肉食恐竜の噛み跡と考えられる標本も勝山市から採集されている。

この外に、湖や河の中には硬鱗魚の仲間が泳ぎ回り、ユニオやトリゴニオイデスなどのドブガイの仲間やタニシ、カワナなどの貝も豊富にすんでおり、岸辺周辺ではワニやカワガメの仲間のカメも生活し、鳥類も存在していたことがわかっている。

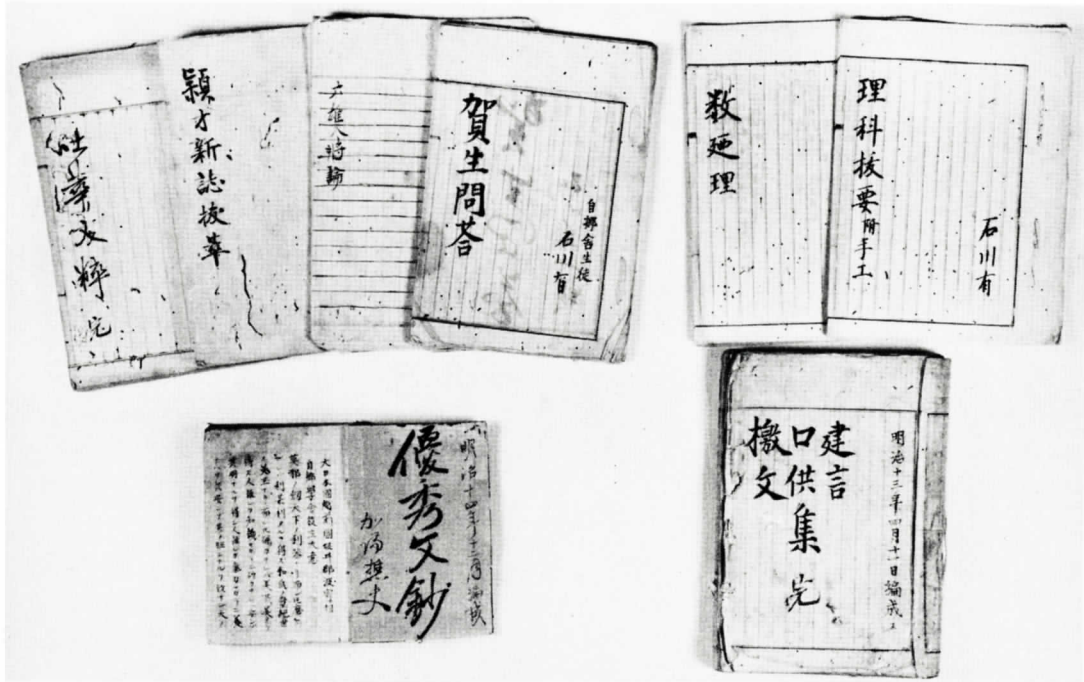
しかし、恐竜を中心にした古環境を復元するには、外国の例を参考にするとまだまだ足りない材料が多くある。例えば、恐竜の卵の化石もその一つである。けれども、可能性は残されている。この夏の調査で、白峰村から明らかに肉食恐竜の子供の歯が発見されている。そうなれば卵の化石があっても不思議ではない。さらに、翼竜もいてほしい。両生類もほしい。哺乳類も期待したいところである。

今年度はじまった福井県の恐竜化石調査はあと4年つづく。調査たびに、描いている手取湖の古環境はさらに変わっていくことは確実である。すなわち、手取層群は、日本の恐竜研究の最前線である。

(東 洋一)

資料紹介

「自郷学舎」生徒の書籍・筆記帳



西南戦争を終えて、すでに壊滅状態にあった全国的な民権政社「愛国社」の再興のため、明治11年(1878)9月、民権有志の大会が大阪で開かれた。その中心勢力であった土佐の立志社と交わりをもつ杉田定一も、民権運動の地方拡大をめざし、越前に新たな民権政社の創設を企てた。同12年7月、定一は、父仙十郎とともに、郷里の坂井郡波寄村で自家の酒倉を改造し、「自郷学舎」と名付けた私塾を開いた(『杉田鶴山翁』によると、「じきょうがくしゃ」が正しい読みと思われる)。そして、翌8月には、学舎を基盤に、民権政社の「自郷社」を創設。自由民権の指導者として、越前における地租改正反対運動や国会開設請願運動を推進させた。

写真で紹介した史料は、このたび新たに収集した自郷学舎生徒、坂井郡取次村の石川正一の書籍(写し)・筆記帳の一部。現在、自郷学舎に関する史料は、大阪経済大学が所蔵する杉田家文書に残されている。そのうち、「自郷学舎仮規則」には、学舎に舎長・幹事・会計司・生長(教務主任)・法律研究係をおき、学課は歴史・窮(究)理・法律・文章の4課、授業は毎日5時間、試験は毎月25日、定休は31日を

のぞく1と6のつく日とされている。また、「自郷学舎生徒入校表」には、石川正一のような地元の坂井郡の農民に加え、遠く熊本や金沢、そして、おそらく福岡の民権政社「向陽社」に関わる人たち(士族)の名も見うけられる。しかし、実際の学舎の運営については、まだまだ不明な点が多い。

今回収集したのは、「優秀文鈔」「建言・口供・檄文集」「六雄八将論」「賀生問答」「穎才新誌抜萃」「吐華文粹」「理科抜要附手工」「教廼理」の全部で8冊。石川正一が、学舎に通って文章や窮理の学課で学んだ時のものと思われる。なかでも、「優秀文鈔」「建言・口供・檄文集」には、かつて政府に反旗をひるがえした民権士族の建言や口供、愛国社をはじめとする各地の民権団体や集会などの檄文がまとめられ、学舎が地域の民権運動の担い手を養成する教育機関であったことを如実に物語る。杉田家文書以外に、このような自郷学舎に関連する史料が確認されたのは、はじめてのことであり、今後、学舎の具体的な運営状況や教育内容を知る手がかりになるだろう。

(笠松)

入館者の声

「人類誕生400万年」展をみて…

6月23日より開催した「人類誕生400万年」展の期間中に実施したアンケートに寄せられたご感想・ご意見をいくつか紹介します。

- これが自分の祖先だったんだなあと思えたのが変な気分だった。
- 学校で人類についての勉強は終わったけれども、歴史の勉強になってよかった。また、学校で習わなかったことがわかってよかった。自分で想像していたよりすごかった。
- 子供を連れてきてよかった。今の人間ができるまでや昔の人の生活がどのようだったかを、少しずつわかりやすく教えることができた。

○ サルから人類への進化の流れについて、ビデオでのアニメによる説明は具体性があったが、説明パネルの文章が長く、小中学生には読み切れないのではないかと思います。強調したい単語類は色文字や大文字にするなどの工夫があってもよいと思います。さらに、むずかしい漢字にはよみがなをつけてほしい。

- 子供たちには「脳の重さをはかるコーナー」といった体験コーナーがあったので、展示にも興味をもったようでした。
- 自分の脳の重さを測定していただき、66年間も持ち歩いていた頭の重さにおどろきました。

ビデオライブラリーから

焼畑

— 赤かぶらをつくる —

焼畑は木や草を焼き払い、自然に蓄えられた養分だけで作物をつくる、たいへん古くからの農業技術です。今ではほとんど行われていませんが、県内でただ1か所の例外が美山町の河内です。今でも毎年5、6軒の家が焼畑をしているのです。焼畑は急な傾斜地の草木を刈り取り、じゅうぶん乾燥させて火をつける。作物の種をまいたあとは草を取る程度ですが、たいへん辛い作業の連続ですし、収穫も必ずしもよいものではありません。ではどうして河内では、焼畑が今も行われているのでしょうか。

焼畑は主食を確保するためのヒエやソバなどの雑穀をおもにつくっていましたが、現在の河内では赤かぶらだけがつくられています。河内かぶらと呼び、大野の冬の料理に欠かせず、高い値で売ることができます。ところがこのかぶらは河内の焼畑でしかできない、といわれてきた独特な品種なのです。

河内の焼畑はこのかぶらをつくるために行われているのです。河内でも昔どおりの焼畑が行われているわけではありません。しかし観光目的などでない焼畑が今も生きていることはたいへん貴重なことです。この番組では焼畑と独特な赤かぶら栽培を1年にわたって収録しました。

(坂本)

北陸古代の玉づくり

古代の北陸地方は、装身具や権力者のシンボルとしての玉をたくさん生産したところでした。

まず縄文時代から弥生時代にかけて、新潟県西部から富山県東部の海岸に打ち寄せられるヒスイの原石を用いて玉が作られ、日本中にもたらされました。弥生時代には、これに加え、^{へきぎよく}碧玉や^{びやうかいがん}緑色凝灰岩と呼ばれる石材を用いて管玉が作られ始めました。三国町下屋敷遺跡のように、玉を集中的に生産した専門的なムラも存在します。この時代の玉作りは、石に玉鋸で溝を切り、これを打ち割って目的の大きさに近づけていく方法が一般的でした。弥生時代の終わり頃には鉄製工具が普及し、タガネなどで直接打ち割るようになって量産化が進み、北陸の玉作りは最盛期をむかえました。古墳時代の玉作りは、在地の有力豪族の主導のもとに行われ、政治的意味合いの強いものでした。とくに北陸では、^{いしくしろ}首長の権威を示す宝器である車輪石や石釧と呼ばれる腕輪を生産し、これらの石製品は、在地首長から畿内政権へもたらされ、さらに各地の首長へと配布されたようです。

このビデオでは、以上のような北陸の玉作りの歴史を、美しい玉製品や、玉作り遺跡を見ながらたどっていきます。

(久保)

秋から冬の行事あんない

秋の特別展

〔開館5周年記念行事〕

10/20(金)~11/26(日)

観覧料：一般400円/大高生300円/小中学生200円

石をめぐる歴史と文化 - 笏谷石とその周辺 -

笏谷石利用の長い歴史と広がり为代表的な遺物でたどるとともに、くらしの中の石、石の信仰を見直す。

<関連行事> 講演会

10/29(日)

午後2時から

「石と日本人」

近畿大学民俗学研究所教授 野本 寛一 先生

さまざまな祈りの場面に、石や石の神仏がある。それは石の固さだけではなく、日本人の石への想いを物語っている。

冬の館藏品展

2/7(水)~3/18(日)

観覧料：一般200円/大高生150円/小中学生100円

今までに未公開の館蔵資料や新しく収集した資料を中心に、いくつかの分野において紹介する。

講演会

3/4(日)

午後2時から

「古代朝鮮と日本海文化」

九州大学教授 西谷 正 先生

北陸地方は、大陸の影響を強くうけた古代文化の栄えた地といわれる。いわゆる「日本海文化」について、朝鮮考古学の立場からその意味を問直す。

考古教室：石の考古学

午後2時から

対象 高校生以上

10/21(土) 石器の時代
10/28(土) 古墳時代の石棺
11/4(土) 越前の中世石造物
11/11(土) 石をめぐる人びと

福井考古学会会員
福井市史編さん室
本館資料調査員
本館学芸員

松井 政信 先生
白崎 卓 先生
山本 昭治 先生
久保 智康

歴史教室：明治のふくいII

午後2時から

対象 高校生以上

1/20(土) 城下町から地方都市「福井」へ
1/27(土) 郵便と電信のはじまり
2/3(土) 地方の新聞ができる
2/17(土) 新しい時代と農村
3/3(土) のびゆく鉄道網

県史編さん課
本館学芸員
本館学芸課
県史編さん課
藤島高校教諭

吉田 健 先生
山形 裕之 先生
笠松 雅弘 先生
中島 嘉文 先生
小谷 正典 先生

民俗教室：ふくいの住まいと衣

午後2時から

対象 高校生以上

2/10(土) ふくいの民家
2/24(土) 住まい方の習俗
3/10(土) 織りと染め-手仕事とくらし
3/17(土) 仕事着とくらし

福井大学教官
本館学芸員
仁愛女子短期大学教授
本館学芸員

福井 宇洋 先生
坂本 育男 先生
中野千鶴子 先生
田中 敏博

学習会

(対象)
10/22(日) 石器をつくろう 小学生以上
12/3(日) 古文書の整理と補修 高校生以上
12/17(日) しめ縄をつくろう 小学生以上

見学会

11/5(日) 歴史散歩 (行き先) 加賀市
11/26(日) 体験!遺跡の発掘 河野村

ミュージアムシアター(映画会)

10/15(日) 「奈良の寺と仏像」〔絵巻〕
11/19(日) ふるさとの記録フィルム：「福井大震災」ほか3本
12/10(日) 「神々と里人たちの宴」「鬼さまが訪れる夜」
1/21(日) 「生きている千濁」「生きている化石-コモドトカゲ」
2/4(日) <ビデオ> 「北陸古代の玉つくり」「藤ノ木古墳」
3/11(日) 「連帯の手わざ」「旗打ちに生きる」

野外観察会

10/8(日) 秋の植物 越前海岸
11/3(祝) 恐竜化石のぞる地層 白峰村

○お問い合わせ、申し込みは、博物館の学芸課まで。
○日時・内容を、一部変更することがあります。

ふくいミュージアム

No.16

1989. 9. 30発行

編集

発行

印刷

福井県立博物館
福井市大宮2丁目9-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
出口印刷株式会社